



## 『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿-第六帖(2) : 下草～雑の草

著者	福田 智子, 土山 玄, 藤井 翔太, 久保 文乃
雑誌名	文化情報学
巻	7
号	1
ページ	82-69
発行年	2011-10-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013121">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013121</a>

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖(2) 下草(雑の草)―

福田 智子・土山 玄  
藤井 翔太・久保文 乃

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、下草・雑の草の題に配されている出典未詳歌、八首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、出典考証をもとに、出典未詳歌について注釈を加えるものである。
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を( )を付して記す。
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
- 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一し、踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を( )に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(江)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本 略称(紀)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)

○寛文九年版本

略称(寛)

なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和歌六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月)所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

## 注釈

三五七三(下草)

【本文】

かしは木のもりのしたくさ年ふともひかりをいつかみんとたのみし

【校異】なし

【語釈】○かしは木 柏の木。葉守りの神が宿っているという伝説から、宮中警護にあたる兵衛・衛門の異称。『枕草子』には、「柏木いとをかし。

葉守りの神のますらむも、いとをかし。兵衛督、佐、尉などをいふらむも、をかし。」(日本古典文学全集第四十七段)とある。○もりのしたくさ「もり」は、「森」と「守り」との掛詞。「したくさ」は、木の下に生えている草。兵衛・衛門の職にある男性の庇護下にある女性を暗示する。○年ふとも 時がたつても。年月が過ぎても。「とも」は接続助詞で、逆接の仮定条件を表す。○ひかりをいつかみんとたのみし「ひかり」は、目上の人からの庇護や恩寵の比喩。「ひかりをみる」で、格別に引き立てられる意。「たのみし」の「し」は、過去。

【通釈】

柏木の森の木の下に生えている草は、たとえ時が経っても、いつか日の光を見るだろうかと頼みにしていた。そのように私も、たとえ年をとつても、いつかあなたが愛情をかけてくれるだろうかと頼りにしていたよ。

【他出】なし

【考察】

「かしは木のもりのしたくさ」という句のごく初期の例は、「かしはぎのもりのしたくさくれごとになほたのめとやもるをみるみる」(蜻蛉日記・上・一八)であろう。道綱母が兼家に送った歌で、当時、兼家は右兵衛佐であった。「語釈」でも触れたように、「かしは木」は、兵衛・衛門の異称であり、この歌では兼家を指す。「かしは木のもりのしたくさ」は、夫がなかなか訪ねて来ず、空閨をかこつ道綱母を暗示する。後に『後拾遺集』にも採られている。

また、『大和物語』第二十一段には、「かしはぎのもりのしたくさおいぬとも身をいたづらになさずもあらなん」(三一)、「かしはぎのもりの

したくさおいのよにかかるおもひはあらじとぞおもふ」(三二) という贈答歌がある。良少将が兵衛佐であったころ、通っていた監の命婦が、老いて見捨てられないかと案じて詠んだ歌と、それに対する返歌である。いずれも上句は、当該歌に共通した表現である。

以上の用例を踏まえると、当該歌は、兵衛・衛門の官職にある男性から愛情が得られなかった悔恨の情を詠んだ歌であると推察される。当該歌の第三句「年ふとも」には、前掲『大和物語』の監の命婦の歌の「おいぬとも」の意と通じるものがある。

「ひかり」と「たのむ」との組み合わせは、「久方の中におひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる」(古今集・雑下・九六八・伊勢・かつらに侍りける時に、七条の中宮のとはせ給へりける御返事にたてまつれりける)や、「こがくれのした草なればみねのうへのひかりもつひにたのまれなく」(元良親王集・五五・をんな)などがある。とくに後者は、女性自身を「こがくれのした草」に喩え、結局「ひかり」(庇護)を受けられなかったと詠む点で、当該歌と趣向が類似している。

三五八三(雑の草)

【本文】

我がよしもちよにあらめやねなしぐさはれやせましよのわかいと  
き

【校異】○題ノ位置ニ「ねなし草」―歌頭右上「ねなしぐさ(草)」(松・

江・和・林・宮・紀) ○よ、―よく(林)よし(寛)世し(黒) ○よ  
六二身  
―よ(和・宮)身(黒・寛)

【語釈】○我がよしも「よしも」には、「よ、も」「よくも」の異文があ

るが、底本を版本系本文(寛文九年版本・黒川本)によって校訂した(考察)参照。「我がよ(世)」は、私の一生。「しも」は、副助詞「し」に係助詞「も」が付いて、承ける語句(ここでは「あらめや」)を強調する。

○ねなしぐさ 水中に漂っている浮草。根無し葛を指すともいう。根がないという名をもつことから、浮ついた人や心情を連想させる。○たはれやせまし「たはる(戯)」は、男女が浮気心で交際する意。「やは疑問。「まし」は、ためらいの意志を表す。……しようかどうか。

○よのわかいとき 「よ」は初句と同じく、人生の意。根無し草の縁で、「節」を響かせるか。「わかい」は形容詞「若し」の連体形「若き」のイ音便。同様の例は、『古今六帖』第二帖の題目録や一四一九・一四二〇番の題「わかいこ」の他、「いまやうのわかい人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし」(『一条撰政御集』三番詞書)にも見出される。

【通釈】

私の一生も、決して永久ということはあるまい。根無し草のように、浮ついた恋に溺れてしまおうか。一生のうちの若い間は。

【他出】なし

【考察】

「我がよしもちよにあらめや」という表現は、『万葉集』の「百代しも千代しも生きてあらめやもあが思ふ妹を置きて嘆かむ」(巻十一・二六〇五・二六〇〇)という歌の上句を下敷きにしていると考えられる。「我がよしも」という句には、「わかよ、も」「わかよくも」の異文があるが、すでに「語釈」で述べたように、版本系本文(寛文九年版本・黒川本)の本文をもとに「我がよしも」に校訂した。

「ねなしぐさ」の用例は、『新編国歌大観』に拠ると、のべ十例あり、

当該歌が初出である。ただし、勅撰集に採られるのは、「あすしらぬみむろのきしの根なし草なにあだしよに生ひはじめけん」(久安百首・小大進(花園左大臣家)・一三九〇・無常)の一首のみである。『千載集』に収められ、その後も『定家八代抄』『歌枕名寄』『題林愚抄』に載せられている。

ところで、「ねなしぐさ」のイメージは、たとえば、「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」(古今集・雑下・九三八・小野小町・文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる)における「ねをたえた」「うき草」とも重なってこよう。水の流れのままに漂う浮草は、成り行きにまかせて浮ついた恋でもしてみようかという当該歌の内容に、相通じるものがある。

第四句中に見られる「たはる」という語は、早くも『万葉集』に、「……人皆の　かく迷へれば　うちしなひ　寄りてそ妹は　たはれてありける」(巻九・一七四二・一七三八・上総の末の珠名妹子を詠む一首、并せて短歌)などの歌が見える。また、勅撰集における初出は『古今集』で、「あきくればのべにたはるる女郎花いづれの人かつまで見るべき」(古今集・雑体・一〇一七・よみ人しらず)の二首の歌がある。私家集では、「いもがかみうつをざさののはなれごまたはれにけらしあはぬ思へば」(人丸集・一八)、「吹くかぜにたぐひてなびくをみなへしたはるるさまに人やみるらむ」(安法法師集・六・をみなへし)、「かりにくる人につけてぞたはれぬるのどけきなつのくさはなれども」(好忠集・一一七・四月をばり)、「とほやまだこぞにこりせず作りおきてもとせしまにいもはたはれぬ」(好忠集・一八九・はじめの秋　七月)、「やぶかくれきぎすの

ありかうかがふとあやなく冬の野にやたはれん」(好忠集・三一〇・中の冬、十一月上)などが見出され、とくに『好忠集』に用例が多い。『好忠集』には他にも、「とほつやまみやぎがはらのはぎみるとあきはかなきたはれなぞたつ」(好忠集・二二三・八月上)・「わぎもこがころもうすれてみえしよりたはれねせじとおもひそめてき」(好忠集・二五八・九月中)といった「たはれな(名)」「たはれね(寝)」という複合語が見出される。さらに、「名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島浪の濡衣きるといふなり」(伊勢物語・第六十一段・一一一)に見える「たはれ島」の例も有名である。

「……やせまし」という表現は、「近江なる打出のはまのうちいでつつ怨みやせまし人の心を」(拾遺集・恋五・九八二・よみ人しらず・題しらず)、「さみだれにみだれやせましあやめぐさあやなし人もいかがわすれぬ」(躬恒集・四四三・あるところのさぶらひにさけたびけるに、めしあげられて、ほととぎすよめとはべりければ)、「ゆきやらすかへりやせまししかすがのわたりにきてぞおもひたゆたふ」(能宣集・一三二・冬、しかすがのわたりにゆきふる、たび人ふねにのりてわたりする所)、「わかすすきあきののわけてうちしのびむすびやせましほにあらずとも」(賀茂保憲女集・三九・なつ)といった例が、同時代までの歌に見える。また、『古今和歌六帖』にも、他に、「あはでのみおもへばくるしありそうみのうらみやせましかひはなくとも」(第三・一八八一・うら)、「かれかねてしもにうつろふくずのはのうらみやせまし風につげつつ」(第六・三八八二・くず)の二例があり、当該歌を含めた三例すべての用例が、出典未詳歌であることには注意しておきたい。

なお、「雑の草」題の歌について、具体的な植物名を記載する伝本

があり、その記載位置も、歌題に記すものと、歌頭に記すものがある。この点に関しての考察は、岸上慎二氏「古今六帖本文覚え書——写本の形による読み——2」（『語文』八日本大学国文学会六十七号、一九八七年三月）に詳しい。

三五八六（雑の草）

【本文】

あぢきなやいぶぎのやまのさしもぐさおのがおもひに身をこがしつ  
つ

【校異】 ○歌頭ニ「サシモクサ」一題ニ「さしもぐさ」(黒)「さしも草」(寛)

【語釈】 ○あぢきなや 「あぢきなし」は、思うようにならない、どうしようもないの意。 ○いぶぎのやま 滋賀・岐阜の県境にある伊吹山地の主峰。薬草が豊富である。 ○さしもぐさ 蓬。伊吹山を名産地とする。灸に用いる。『日本国語大辞典』（第二版）では当該歌を用例とする。 ○おもひ 思慕の情。「おもひ」に「火」を掛ける。 ○こがしつ 「こ(焦)がす」は、苦悶させる意。火で焼いて黒くする意を掛ける。「つ」は継続。

【通釈】

どうしようもないなあ。伊吹の山のさしもぐさは、自分の燃えるような思慕の情によって、身体を焼き焦がし、身を苦悶させ続けている。

【他出】

『袖中抄』八二番

あぢきなやいぶぎの山のさしも草おのがおもひに身をこがしつ

『歌枕名寄』雑篇、六二三九番

山

六帖

あぢきなやいぶぎの山のさしも草おのがおもひに身をこがしつ

『歌枕名寄』下野国、六八〇三番

伊吹山 或云、さしもぐさのもゆるといへるは当国伊吹なり、

非近江国云云、一説載之

六帖

あぢきなやいぶぎの山のさしも草おのがおもひに身をこがしつ

『色葉和難集』七一一番

実方

あぢきなやいぶぎの山のさしもぐさおのが思ひにみをこがしつ

【考察】

当該歌は、初句「あぢきなや」で切れるが、同じ例は、「あぢきなやこひてふ山はしげくともひとのいるにやわがまどふべき」（一条撰政御集・九八・たれとしらず、人ともものたまふに、やりどをたてていらたまひぬれば）、「あぢきなやたびのやどりをくさまくらかりならずとてさだめたりとか」（義孝集・二・返し）といった歌に見える。

「さしもぐさ」は、有名な「かくとだにえやはいぶぎのさしもぐささしもしらすなもゆるおもひを」（後拾遺集・恋一・六一二・藤原実方朝臣・をんなにはじめてつかはしける）という歌のように、「もゆ」「おもひ」といった語ともに、恋の歌として詠まれることが多い。

「いぶぎのやま」は、「さしもぐさ」の産地として名高い。「けふも又かくやいぶぎのさしも草さらばわれのみもえやわたらん」（新古今集・

恋一・一〇・一一・和泉式部・題しらず)、「いかにしていかにいぶきのさしもぐさ下にこがるることをかたらむ」(惟規集・十二・おなじころ)などの用例がある。

「おのがおもひ」という歌句は、『新編国歌大観』による限り、『古今六帖』が、ごく初期の例と言えるであろう。しばしば十世紀の終わりから十一世紀に活躍した歌人に詠まれ、「さ月山ともしにみだるかり人はおのがおもひにみややくらん」(重之集・二五〇・夏廿)や「したやみにをぐらの山をゆく人はおのがおもひをたのむなるべし」(重之女集・二三・夏二廿)、「はりまがたゆきかふふねのほにあげておのがおもひのまふまふぞゆく」(大式高遠集・二二一・はりまがたをすぐとて)、「みづのうへにわたるほたるのかげみればおのがおもひもよられざりけり」(嘉言集・一七一・水のほとりのほたる)といった例が挙げられる。これらの歌における「おもひ」の「火」は「ともし」や「漁火」、「ほたる」であり、当該歌の「さしもぐさ」と同様、激しく燃え上がる炎というよりはむしろ、自己の内面でくすぶり鬱屈した火であると考えられる。

『古今六帖』において、当該歌の作者は特に記されていないが、「他出」にあるように、『色葉和難集』七一一番では実方によって詠まれたとされる。実方は前掲『後拾遺集』六一二番歌以外にも「こひしともえやはいぶきのさしもぐさよそにもゆれどかひなかりけり」(実方集・二五二・女わづらひて、ひさしくわづらひて、まゐらざりしかば、はしをみよとて)という「さしもぐさ」の歌を詠んでいることから、当該歌も後に実方の歌とされたのかもしれない。なお、冒頭に挙げた、『百人一首』にも採られた実方の有名歌が、現存する『古今六帖』諸本に収載されていないことには、留意すべきであろう。

三五八七(雑の草)

【本文】

ちぎりけん心からこそさしまぐさおのがおもひにもえわたりけれ

【校異】 ○さしまくさ―さしも草(松・和・江・林・宮・紀・黒・寛)

○もえわたりけれ―もえわたりけり(林)

【語釈】 ○ちぎりけん「ちぎる」は男女が将来の変わらぬ愛を誓うこと。

「けん」は過去推量の助動詞。 ○さしまくさ「さしもぐさ」と同意か。

袖中抄に「又さしも草とさしま草とさせも草と又同事也。しとせと同五音也。もとま同五音也。」とある。 ○もえわたりけれ 絶えず火が燃

え続ける意に、心の中の恋の苦しみが絶えず続く意を掛ける。

【通釈】

あなたと将来を約束した時の気持ちがあったから、私の思いは、胸のうちで、さしもぐさの絶えずくすぶる火のように、燃え続けてきたよ。

【他出】

『夫木抄』雑歌十、一三六三八番

指焼草

(ママ)  
雑歌中、六一

読人しらず

ちぎりけん心からこそさしも草おのがおもひにもえわたりけれ

【考察】

「ちぎり」を結んだ後、相手方の心変わりのために苦悩するという状況は、『百人一首』にも採られた「ちぎりきなかたみにそでをしほりつ つすゑのまつ山なみこさじとは」(後拾遺集・恋三・七七〇・清原元輔・心かはりてはべりけるをむなに人にかはりて)にも共通するものがある

う。

上句にある「ちぎりけん心」という語句を有するものは「契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは」（古今集・秋上・一七八・藤原おきかぜ・おなじ御時きさいの宮の歌合のうた）がある。

この歌は『寛平御時后宮歌合』の歌（一一七番、一六三番）であり、『新撰万葉集』四六〇番、『興風集』五番、そして『古今六帖』一四三番にも採歌されている。この歌以降、「ちぎりけむ」ころぞながきたなばたのきてはうちふすとこなつのはな（皇太后宮歌合〈東三条院〉・一〇・よしのぶ・たなばた、ひこぼし、くものうへにあり、また、つりしたるかたなどあり、すはまのすぎきに、水てにて）とあるように、「ちぎりけん心」に七夕のイメージを重ね合わせて詠むことがあったようである。一方、当該歌は「ちぎりけん心」から生まれる感情が「おのがおもひ」の鬱屈とした「火」となり、そのために苦悩し続けるという内容で、この点において先の七夕の歌とは一線を画している。

当該歌は、前の『古今六帖』出典未詳歌、三五八六番と、第三句から結句までの言い回しや内容が類似している。これは、自分自身の「火」によって恋の思いをくすぶらせ続けるという「さしま（も）ぐさ」の本意に根差す表現パターンと言えるであろう。

三五八八（雑の草）

【本文】

なほざりにいぶきのやまのさしもぐささしも思はぬことにはあらぬ  
ぬ

【校異】〇ことにはあらぬ―ことやはあらぬ（和・林・宮）

【語釈】〇なほざりに 軽い気持ちで、いい加減にの意。主として、男性の女性に対する行動について言う。〇いぶきのやまのさしもぐさ

地名「いぶき（伊吹）」に「言ふ」を掛ける。また、同音反復の序詞で「さしも」を導く。〇さしもぐさ 植物名「さしもぐさ」に、「さしも」（すでに知っている事物、事態を実際のに指示する副詞である「さ」を強めた言い方。否定や反語の表現を伴って用いることが多い）を掛ける。

【通釈】

あなたは私にいい加減なことを言うけれど、伊吹山に生えているさしもぐさのように、私はそうは思いません（それはあなたの本心ではないでしょう）。

【他出】

『袖中抄』 八六番

なほざりにいぶきの山のさしも草さしもおもはぬことにはあらぬ

『色葉和難集』 七一四番

なほざりにいぶきの山のさしも草さしもおもはぬことにはあらぬ

【考察】

「なほざり（に）」という語の勅撰集における初出は、『後撰集』である。「なほざりに折りつるものを梅花こきかに我や衣そめてむ」（春上・一六・閑院左大臣・題しらず）、「なほざりに秋の山べをこえくればおらぬ錦をきぬ人ぞなき」（秋下・四〇三・よみ人も・題しらず）という例がある。いずれも季節の部立に配されているが、『千載集』以降は、恋の部立で詠まれることが多くなり、『新後撰集』では入集した五首すべてが恋の部立である。

第四句に見える「さしも」は、『古今六帖』の用例が、『新編国歌大観』



におけるごく初期の例と見られる。もつとも、『万葉集』には、「百積船  
 潜納八占刺母雖問其名不謂」(二四一一・二四〇七・正述心緒)という歌  
 があり、第三・四句を「占 刺母雖問」と認めれば、「うらなふに さし  
 もとへども」と読むことができる。『校本萬葉集』によれば、細井本・  
 西本願寺本・温故堂本・大矢本・京都帝国大学本が、この訓を記す。勅  
 撰集では、『後拾遺集』が初出で、「ふしにけりさしもおもはでふえたけ  
 のおとをぞせましよふけたりとも」(雑二・九〇九・和泉式部・をどこの  
 よふけてまうできて侍けるにねたりとききてかへりにければつとめてか  
 くなむありしとをどこのいひおこせてはべりけるかへりごとに)、「やす  
 らはでたつにたてうきまきのとをさしもおもはぬ人もありけり」(雑二・  
 九一〇・和泉式部・よひのほどまうできたりけるをどこのとくかへりに  
 ければ)の二首がある。また、『和泉式部集』には「あふことのありし  
 所をきてみればさしもおもはぬちりぞぬにける」(二〇八・人にあひて  
 ものいひし所を、ひごろほかにありてきてみれば、いたうちりばみたる  
 をみて、いひやる)という歌も見える。以上三首の和泉式部歌は、当該  
 歌の「さしも思は(ぬ)」という歌句と一致する点、留意しておきたい。  
 結句「……にやはあらぬ」の用例は、『万葉集』にはなく、『古今集』  
 に四首、『後撰集』に五首見出されるが、それ以降のどの勅撰集におい  
 ても、一例あるかないかである。私家集においても、躬恒や貫之、元真、  
 義孝、能宣、実方らに詠まれており、十世紀後半までに活躍した歌人の  
 歌が目立つ。

三五八九(雑の草)

【本文】

しもつけやしめつのはらのさしもぐさおのがおもひに身をやくら  
 ん

【校異】なし

【語釈】○しもつけ 下野国。東山道八か国のひとつ。現在の栃木県。  
 ○しめつのはら 「しめぢがはら(標茅原)」と同じか。袖中抄に、「し  
 めぢがはら、しめづのはら、しめじのはらは同事也。ちとつと同五音  
 也。」とある。

【通釈】

下野国の標茅原に生えているさしもぐさは、自分自身の燃えるよう  
 な恋の思いによって、我が身を焼き、苦悶させているのだろうか。

【他出】

『夫木抄』雑歌十、一三六三九番

同(雑歌中)、同(六二)<sup>(ママ)</sup>

同(読人しらず)

『袖中抄』八四番

しもつけやしめぢがはらのさしも草おのが思ひに身をやくらん

『歌枕名寄』下野国、六八〇五番

標茅原

六帖

しもつけやしめぢが原のさしもぐさおのが思ひに身をやくらん

『色葉和難集』七二二番

しもつけやしめぢが原のさしも草おのがおもひに身をやくらん

## 【考察】

『古今六帖』において、当該歌の次には、「かむつけのいならのぬまのおほみぐさよそに身よりはいまこそまされ」（第六・三五九〇・さしもぐさ）という歌が配されている。この歌は、『万葉集』巻第十四、三四三六（三四一七）番が出典とみられるが、当該歌との間で、上句の構造が共通している。すなわち、初句は国名に助詞が付き、第二句は地名に助詞「の」が付き、そして第三句には植物名がくるという作りである。

「しもつけ」の用例は、『万葉集』に、「下野の三叢の山のご櫛のすまぐはし児ろは誰が筈かもたむ」（巻十四・三四四三・三四二四・右の二首、下野国の歌）、「下野の安蘇の川原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ」（巻十四・三四四四・三四二五・右の二首、下野国の歌）という二首の歌がある。一方、十世紀後半に成立したと思われる『人丸集』には、「春さぬと人しもつげずあふ坂のゆふつけどりの声にこそしれ」（二六一・しもつけ）という歌があり、「しもつけ」が物名として詠まれている。また、勅撰集における初出も、「うゑて見る君だにしらぬ花の名を我しもつけん事のあやしき」（拾遺集・物名・三六一・よみ人しらず・しもつけ）という物名歌である。当該歌の読みぶりは、これら平安期の用例ではなく、先の万葉歌と軌を一にする。

「しめつのはら」は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌の他に例は見えない。一方、「他出」で示したように、『夫木抄』『歌枕名寄』『色葉和難集』では、「しめぢがはら」という本文になっている。そこで、「しめぢがはら」の用例を見てみると、「なほたのめしめぢがはらのさせもぐさ我がよの中にあらむかぎりは」（新古今集・釈教・一九一六・清水観音）や、「いかなればしめぢが原の冬草のさしもなくてはかれはてに

けん」（新千載集・雑下・二一五八・よみ人しらず・心ざしもなくてただにやみにける男のもとにつかはしける）といった例がある。

なお、『古今六帖』三五八六番歌の「考察」において指摘した「さ月山ともしにみだるかり人はおのがおもひにみをやくらん」（重之集・二五〇・夏廿）という歌は、下句が当該歌と同一である。この下句は、前掲『古今六帖』三五八六番の「おのがおもひに身をこがしつ、」、および、『同』三五八七番の「おのがおもひにもえわたりけれ」とも、表現が似ている。ここに、『古今六帖』出典未詳歌と初期百首のひとつである『重之百首』との表現の類似性を見出すことができる。

三五九一（雑の草）

## 【本文】

うかりけるみぎはかくれのかくもぐさはすゑもみえずゆきかくれな  
ん

【校異】 ○歌頭二「カクモクサ」―題二「かくもぐさ」（黒・寛）

【校異】 ○みきはかくれ―みにはかくれ（紀）

【語釈】 ○うかりける「うし」は、つらいと思わせる相手の態度をいう。

無情だ。冷淡だ。「かくもぐさ」の縁で、「浮く」を響かせるか。○みぎはかくれ 水辺の物陰に隠れていること。○かくもぐさ 植物。『和歌童蒙抄』（草部、五九九番）では、当該歌を挙げて、「黄連（おうれん）」の古名とする。○はずゑ 葉の先。葉の先端。○ゆきかくれなん

「ゆきかくる」は、姿をくらますの意。「なむ」は希求の終助詞。

## 【通釈】

冷淡なあなたは、汀に隠れるかくも草のようだ。どうせなら葉の先

すら見えないよう、すっかり姿をくらませてほしいものだ。

【他出】

『和歌童蒙抄』 草部、五九九番

うかりけるみぎはぐくれのかくもぐさはずゑもみえずゆきかくれなむ

【考察】

時折、ほんの少しだけ姿を見せる冷淡な恋人を、「みぎはぐくれのかくもぐさ」に喩え、いつそ全く姿を隠してほしいと訴えた歌。

「みぎはぐくれ」の用例は、『新編国歌大観』によると、のべ八例しかなく、当該歌が初出例と見られる。次いで、「ふかさはだみぎはぐくれのまこも草昨日あやめにひかされにけり」(和泉式部集・五二二・五月五日、ちまきを人のもとにやるとて)が見える他は、「霜枯はなにをよすがのおもひ草あるにもあらぬみぎはぐくれに」(雪玉集・内裏着到・三〇〇八・冬草纒残)、「しをれふす汀がぐれの冬草に池のうへまで霜むすぶなり」(雪玉集・三十首・七六一・寒草霜)といった、後世の用例にとどまる。

「かくもぐさ」を詠んだ歌は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌の他は、同じ『古今六帖』の「わがやどにかくもをうゑてかくもぐさかくのみこひばわれやせぬべし」(第五・二九九六・おもひやす)が見出せるのみである。当該歌では、「みぎはぐくれ」「かくもぐさ」「ゆきかくれなん」というように、「かく」という音を三回繰り返して用いているが、この『古今六帖』二九九六番歌も、「かく」の同音反復が見られる。「かくもぐさ」を詠む際の共通点として、留意しておくべきだろう。

「はずゑ」の勅撰集における初出は、『金葉集』を待たねばならな

い。一方、私家集では、十世紀後半頃から用例が見られ、「やそしまのまつのはずゑをかずへつついまゆくすゑのほどはしるらん」(重之集・三三二・いはひ)、「むすほほるはちすのいとをとかれずはずゑのいかにみだれざらまし」(源賢法眼集・四四・法花経とく所にて)、「ささがにのすがく葉ずゑの浅茅よりみだれてかかるしらつゆの玉」(長能集・七七・露)などがある。また、『宇津保物語』にも、「葉ずゑこそ秋をもしらめねをふかみそれみちしばのいつか忘れん」(としかげ・九・わかこ君(兼雅))の用例がある。

三五九二(雑の草)

【本文】

年をへて何たのみけんかつまたのいけに生ふてつれなしのくさ

【校異】○歌頭ニ「ツレナシクサ」―ナシ(宮) 題ニ「つれなし草」(黒・寛) ○いけに生―いけにをふ(永) 池にをふ(和) 池にほふ(宮) ○くさ―花(松・江・紀)

【語釈】○年をへて「年経(としふ)」は、年が経つ、年月が過ぎるの意。○何 どうして。 ○かつまたのいけ 未詳。奈良市西ノ京町にあったか。薬師寺の北にあった池、あるいは、薬師寺南西の七条大池ともいわれる。『夫木抄』は美作国あるいは下総国、『歌枕名寄』は美作国とする。「かつまた」(接続詞「かつ」に副詞「また」の付いた語。さらにまた、その上にの意。)を掛ける。 ○つれなしのくさ 蓮の異名とする説もある(「考察」参照)。「つれなし」(無情だ、よそよしいの意)を掛ける。

【通釈】

長い年月を経て、どうしてつれないあの人を頼りにしてきたのだろう

か。勝間田の池に、さらにまた生えているという、つれなしの草を。

### 【別出】

『夫木和歌抄』雑部五、一〇七七二番

(かつまたの池、美作又下総)

同(題しらず)、六三

読人不知

年をへて何たのみけんかつまたの池におふてふつれなしの草

『和歌童蒙抄』第七、草部、五九四番

(雑草)

としをへてなにしたのみけむかつまたのいけにおふといふつれなしのはな

万葉にあり

『歌枕名寄』卷第三十二美作国、八一六七番

(勝間田池)

同(六帖) イナシ

としをへてなにしたのみけんかつまたの池におふてふつれなしの草

### 【考察】

「かつまたのいけ」に関しては、志村士郎氏「『勝間田の池』考」(『日本文学風土学会紀事』創刊号、一九六八年)という論がある。本稿では、この論に導かれながら、特に平安中期までの和歌の用例について、今いちど考察してみたい。

「かつまたのいけ」は、まず『万葉集』に、「勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君がひげなきことし」(万葉集・卷十六・三八五七・三八三五・新田部親王に献る歌一首 未だ詳らかならず)という歌がある。新田部親王が勝間田の池を見て、その美しさに深く感動したため、池から戻つ

て、傍らの婦人にその美しさを話した時の、婦人の戯歌である。左注には、新田部親王が婦人に、「今日遊行でて、勝間田の池を見るに、水影濤々に、蓮花灼々なり、おもしろきこと腸を断ち、得て言ふべからず」と語つたと記されている。「かつまたのいけ」は蓮が咲き乱れる美しい池だったようである。

ところが、これ以降、平安期の用例には、『新編国歌大観』を検する限り、「かつまたのいけ」と蓮との関わりは、まず見られない。『古今六帖』には、当該歌の他に、「かつまたの池にとりゐしむかしよりこふるいもをぞけふいまにみぬ」(古今六帖・第二・一〇六六・やしる)、「かつまたの池にすむてふこひこひてまれにもよそにみるぞかなしき」(古今六帖・第三・一六七二・いけ)という、二首の「かつまたのいけ」を詠んだ出典未詳歌があるが、いずれも「とり」や「こひ」などの生物に着目している。また、私家集においては、「かつまたのいけのこほりのとけしよりやすのうらとぞにほどりもなく」(好忠集・一三・正月申)、「かつまたのいけのうらなみうちへてたちてもゐてもものをこそおもへ」(好忠集(順百首)・五二六・恋十)などが挙げられる。『古今六帖』の成立時期かと目される十世紀後半に活躍した好忠や順の歌に用例があるが、いずれの歌にも蓮は出てこない。

そもそも「かつまたのいけ」は、平安朝の人々にとつては、はるか昔にあった名所として捉えられていたようである。このことは、前掲「かつまたの池にとりゐしむかしより」(古今六帖・一〇六六)という表現からも察せられるところである。また、「かつまたの池にすむてふ」(古今六帖・一六七二)という伝聞表現は、当該歌の「かつまたのいけに生ふてふ」という歌句に共通する。ちなみに、『枕草子』「池は」の段(日

本古典文学全集では第四十五段)の冒頭が「勝間田」であることは、周知のとおりである。

当該歌は、地名「かつまた」に、接続詞「かつまた」の意を掛け、植物名「つれなし(のくさ)」に形容詞「つれなし」を掛けることにより、冷淡な人を長年頼みにしてくるのではなかったという後悔の情を表現している。「つれなしのくさ」を蓮の異名とするのは、前に挙げた万葉歌の、「かつまたのいけ」に美しく咲く蓮と、当該歌の「かつまたのいけ」に生ふてふつれなしのくさ」を直接結びつけたものか。

## 附記

本稿は、歌語研究会(同志社大学文化情報学部学生研究会)の活動の成果であり、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」(課題番号19500217、平成十九〜二十一年度)、および科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」(課題番号22500236、平成二十二〜二十四年度)における研究の一部である。

土山(三五八三・三五八六〜三五八九番)・藤井(三五九一番)・久保(二五七三・三五九二番)が分担執筆し、さらに福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館嶋原平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

## 〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覽―第六帖(2) 下草〜雑の草―

## 凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに( )を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一卷 1 古今和歌集〜4 後拾遺和歌集

第二卷 1 万葉集〜6 和漢朗詠集

第三卷 1 一人丸集〜81 赤染衛門集

第五卷 1 民部卿家歌合〜61 源大納言家歌合 長久二年、253 紀師匠曲水宴和歌〜269 九品和歌、281 歌経標式(真本)〜285 新撰髓腦 290 新撰和歌髓腦、347 古事記〜353 風土記、371 日本霊異記、372 三宝絵、389 土左日記〜393 和泉式部日記、414 竹取物語〜420 落窪物語

第六卷 2 秋萩集〜5 麗花集

第七卷 1 奈良帝御集〜36 肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数〜通し番号を付した歌集名と歌番号で示

す。

〔例〕 3-19貫之 355 『新編国歌大観』第三卷19番目の『貫之集』 355番歌

4、別出本文に異同のある場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざま類似性有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいもの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、参考と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

### 別出歌一覧

したくさ

3572 わがやどののきのしたくさおふれどもこひわすれぐさみれどまだおひず(人丸)

2-1万葉 2479 「わがやどは」「のきにしたくさ」「おひたれど」「みれどいまだおひず」

3573 かしは木のもりのしたくさ年ふともひかりをいつかみんとたのみし

〈未詳〉

3574 おほあらしのもりのしたくさいぬればこまもすさめずかる人もなし

1-1古今 892、2-3新撰和 305、2-6和漢朗 441

3575 我がやどのゆふかげぐさのしらつゆのけぬがにもとおもほゆるかな(さかの女郎)

2-1万葉 597 「おもほゆるかも」

3576 人につくたよりだになしおほあらしのもりの下なるくさの身なれば(みつね)

1-2後撰 1186、7-5躬恒 304

3577 さくらをのをふのしたくさつゆしあらばあかしてゆかんおやはしるとも

2-1万葉 2695 「つゆしあれば」「あかしていゆけ」「ははしるとも」

3578 こといたくさたにもせんいはしろのをかのした草われしかりてば

2-1万葉 1347 「こちたくは」「かもかもせむを」「のへのしたくさ」

にくぐさ

3579 いくしかをとむるかはべのにくぐさのみわかきがうへにさねしことはも

2-1万葉 3896 「いゆししを」「つなぐかはへの」「みのわかかへに」「さねしこらはも」

3580 あしがきのなかのにくぐさにこよかにわれとよみして人にしらるな

2-1万葉 2772 「われとゑまして」「ひとにしらゆな」

3581 秋風になびくかはべのにくぐさにこよかにしもおもほゆるかな

2-1万葉 4333 「なびくかはびの」「おもほゆるかも」

さふのくさ

3582 しほみては入りぬるいそのくさなれやみらくすくなくこふらくのおほき

2-1万葉 1398、2-3新撰和 280 「見る日すくなく」「こふらくおほし」、5-281歌経標 26 「くさならし」「みるひすくなく」「こふるよおほみ」、1-3拾遺抄 318、1-3拾遺集 967

ねなし草

3583 我がよもちよにあらめやねなしぐさたはれやせましよのわかいとき

〈未詳〉

ももよぐさ

3584 ちちははがいへのしりへのももよぐさもよいでませわがいたるまで

2-1万葉 4350 「とののしりへの」 「わがきたるまで」

たむけぐさ

3585 しらなみのはままつの木のたむけぐさいくよまでにか年のへぬらん

2-1万葉 1720 「としはへぬらむ」、2-1万葉 34 「はままつがえの」、5

1-281 歌経標 15 「はままつがえの」 「としのへにけむ」

さしもぐさ

3586 あぢきなやいぶきのやまのさしもぐさおのがおもひに身をこがしつ

〈未詳〉

3587 ちぎりけん心からこそさしまぐさおのがおもひにもえわたりけれ

〈未詳〉

3588 なほざりにいぶきのやまのさしもぐさしも思はぬことにやはあらぬ

〈未詳〉

3589 しもつけやしめつのはらのさしもぐさおのがおもひに身をやくらん

〈未詳〉

3590 かむつけのいならのぬまのおほあぐさよそに身よりはいまこそまされ

2-1万葉 3436 「かみつけの」 「よそにみしよは」

かくもぐさ

3591 うかりけるみぎはかくれのかくもぐさはすゑもみえずゆきかくれなん

〈未詳〉

つれなしぐさ

3592 年をへて何たのみけんかつまたのいけに生ふてふつれなしのくさ

〈未詳〉

丸)

3593 しほあしにまじれるくさのしりくさのみな人しりぬわがしたおもひは(人

2-1万葉 2472 「みなとあしに」 「ひとみなしりぬ」 「わがしたもひは

3594 しばつきのみうらさきなるねつらくさあひみざりせば我こひめやも

2-1万葉 3529 「ねつこぐさ」 「あひみずあらば」 「あれこひめやも」

3595 くれなるのあさはののだにかるくさのつかのあひだも我をわするな

2-1万葉 2773 「あさはののらに」 「かるかやの」 「あをわすらすな」